



まぼろしの新聞ゼネストの真相

『大正八年の幻の争議』

史談会開催日

昭和 53 年 (1978 年) 11 月 29 日

■ 語る人

和田 栄吉 氏

■【谷本正氏の略歴】・

・「不良で、やくざで、文学青年くずれで、左翼くずれだった」と自称する和田栄吉氏は明治27年生れ、現在85歳である(本人は86歳と言っている)。中学を卒業したのが23歳の時。兜町で働き、学資が溜まると学校へ行き、無くなるとまた兜町へ。

印刷人として波乱に富んだ和田氏の、その毒舌ぶりには有名。新聞文選植字工だった青年時代に日本の労働運動の黎明期における先駆的ストライキに会い、それを契機として以後50年を労働運動に、そしてアナキズムの運動に傾倒してきた。今ではその新聞のスト真相を知る唯一の人となった。当時は1年の3分の1以上を刑務所で過ごしたともいう。

昭和7年に満州奉天に満州共同印刷株式会社を設立し取締役工場長に、11年には冀東防共自治政府の囑託として北京通州に赴任した。

また氏は平凡社の故下中弥三郎氏とも親しく、昭和12年に北京新民印刷館という印刷工場の設立に参画、常務取締役となり、おそらく日本では初めて写植機を海外へ。次いで昭和22年には下中氏の創立した東京印書館の専務取締役となり昨年退任した。その間、当時としては珍しい「活字のない印刷所」として写植による出版印刷の先鞭をつけ、下中氏とともに「活版が物理的なものに比べ、

写真光学にもとづく写植に無限の発達をみた」という。

戦後は「活字のない印刷所」をキャッチフレーズとしたフォトタイプ株式会社の取締役社長などをつとめ、昭和33年には東京写植協組初代理事長などの公職もつとめた。

また大杉栄や有島武郎などとも交流を結び、氏の語るところは印刷業はもちろんのこととして思想、文学、さらに三味線、義太夫、博打、留置場……など留まるところを知らない。そういった著名人との親交の一方では名もない印刷工やヤクザの親分といった階層の人達の話が同じ親しみをもって語られている。

第5回メーデーでは総司会役もつとめた

大正8年の新聞争議から
波乱の「印刷人生」を語る

大正8年というすでに50数年の昔になる。若い1人の新聞印刷工であった私が、日本の労働運動の黎明期における先駆的なストライキに会い、それを契機としてそれからの50年を労働運動に、さらにアナキズムの運動に傾倒することになったのだが、その端緒は実にこの年であった。

大正8年の夏、くわしくいうと7月29日を発端として東京の全新聞社の工場従業員は、賃上げと8時間労働制の実施を要求してつぎつぎにストライキに突入し、新聞の発行が遅れたり、地方版が間に合わなかったりしはじめ、7月31日から8月4日までの5日間、市内14社の新聞は完全に発行不能におちいり、ゼネストの形となって東京市民はこの5日間、1枚の新聞をも手にすることができなかった。

そのころ、ラジオはまだなく、もちろん週刊誌もない。新聞が唯一のマス・コミの機関だったから、その点を考えに入れるならば、首都東京の3百万といわれる全市民が、5日間その耳目を奪われたという事態の深刻さと異常さは想像以上であったと思われるが、それがまぼろしの如く起り、まぼろしの如く解決したという事態、私がまぼろしの新聞ゼネストと呼ぶのも決して誇張ではないと思う。

…と和田栄吉氏はかつて「まぼろしの新聞ゼネスト・大正8年の新聞ストの真相」と題し、同人誌『イオム』にこう記している。

このまぼろしの新聞ゼネストは当時、東京全市に散在する新聞印刷工組合革新会を母体にして行われたもので、このストを含む一連の争議によって和田氏の属していた萬朝

報の印刷工場では、労働運動史上に一時期を画した「8時間労働制」が芽を出したという。

昨年11月に東京・新富の日本印刷会館3階会議室で開催された印刷史談会（印刷図書館主催）では、この和田氏を招いて争議の様相が紹介された。また当日は和田氏が親交を結んだ、凸版印刷の井上源之丞氏、共同印刷の大橋光吉氏、大橋松雄氏、大日本印刷の青木弘氏、平凡社の下中彌三郎氏らとの思い出話なども語り、波乱に富んだ半生を回顧、その毒舌の健在ぶりを披露した。

新年の特集を組むに当り、当日の和田氏の話を紹介する。

争議報告書も出る

「革進会」の後進「正進会」では、新聞争議の報告書第一号といえる文書を出した。そこには報知新聞社、萬朝報社、時事新報社、東京朝日新聞社、やまと新聞社、読売新聞社、毎日新聞社の争議経過の報告が載っている。印刷工が自分で文章を書き、文選し、版を組んで刷り、町にまいたもので、和田氏は「こんなことは印刷工でなければできない。このような自主的な運動は今の印刷の労働組合にはないのではないか」と、高く評価している。

- ・新聞が一週間ストップしたが…
- ・大正8年の「幻の争議」
- ・昔は印刷工場間の交流が盛んだった

「幻の争議」は大正7年に始まり、大正8年に完結した。その時に行われたストを、私自身がアナキズムの運動を行っていたためにアナキスト達は「アナキズムの行ったストだ」と言う。しかしアナキズムにストはできるわけではない。そのストには「ただアナキストがいた」というだけである。

その当時は、印刷工場と新聞社は全く別個な存在であった。そして、東京の銀座界隈に新聞社がたくさんあり、時事新報、萬朝報、朝日新聞の人も用事があれば勝手に他社の工場に入って話をするというように、自由な雰囲気にも包まれていた。そのため俳句、川柳、演芸、釣魚の会もでき、その交流も盛んで、朝日新聞の工場の者であっても、隣の時事新報の工場に自由に入出入りする状態だった。これは労働組合ができるキッカケになったともいえるだろう。そんな背景があっ



たわけである。

もちろん新聞社には各社とも朝刊だけのところもあり、朝刊と夕刊だけのところもある。また版数にしても10版から25版ぐらいのところもあれば3版や4版しかないところもあるという状態だったために労働条件、給料とも同一には測りきれない。そんなところからストライキといっても共通した要求項目は、「8時間二部制」ということだけで、それだけを強調したものだ。

労働組合（新聞印刷工組合革進会）は最初、共済組合的だったが、普通の労働組合のように闘争をやらないと気のすまない面があった。そこで結局、横山勝太郎という憲政会の代議士を会長に、加藤勘十氏を顧問にして労働組合の形をとることになった。ストはそこから始まることになる。

・不慣れで争議は翌年にまたがった

一たんストが始まると、労働者、いや、人間のエゴイズムから「あそこの社ではこうなった」と聞くと、隣の社では「うちもこうしよう」ということになり、7月末の毎日新聞社の印刷工場の要求がキッカケとなって東京中の新聞社がストライキに入ってしまった。その時点では労働者側の工場の方も、新聞社の方もストライキに対する訓練を受けていなかった。そこで新聞社の方ではストの処理を行うために新聞連盟なるものを組織した。

ストは全部で7日間だった。最初の3日は従業員が会社に向かって要求を出し、それが結果的にストになった。あとの3日間はストに不慣れな新聞社側が「争議に参加した者は一切採用しない」という申し合わせをし、また連盟内部でも抜けがけ的に新聞を発行しないという申し合わせをしたために起ったもので、これが結局、自縄自縛となり1週間は新聞が1枚も発行できなくなった。

そのような経過を経て、争議は翌年にまたがった。これは、新聞社の方では労務対策ができていず、一方、工場の方でも「8時間二部制にした場合に人間をどのくらい増やしたら良いのか」「会社の出すべき費用はどうなるのか」などと聞かれると返答の仕様がなかったというようなことが原因しているといえよう。したがってゼネストという形にはなったものの「1年待ってくれ、1年の後にやろうではないか」という結末になった。本当の8時間制になったのは翌年である。

当時の新聞社は幼稚なもので、もし申し合わせを破った会社があ



れば、罰金として輪転機を1台とりあげるということを考えた。実際には中央新聞の最も古い輪転機が1台とりあげられたが……。

争議団にしても、東京の日本橋にある、演芸のおさらいなどをやる常盤木倶楽部という貸席に本部を置き、ちょうど争議の時期が夏だったために夏羽織で出入りするということのように、とても争議団とは想像もつかないものだった。

こんな例が示すように新聞連盟も組織的には何も行っていず、また労働者も同様の状態だった。一方、警視庁もあまり厳しくはなく拘留期間は20日と決まっていたために、ある一定の拘留期間がすぎると拘留者を一たん外に出してまた裏口で出たところを捕えるというようなことをやっていた。

・腹と腹との腹芸みたいなものだ

そうこうしているうちに、これは本当の話かどうか分からないが、宮内省から警視庁に「新聞がちっともこないじゃないかと、天皇がしゃべった」という話が響いていった。そこで新聞連盟の安藤正純という代議士が宮内省に呼ばれたが、警視庁はその時に「最初の3日は職工たちのストだが、あとの3日は経営者側の新聞連盟が1枚も新聞を出さないという申し合わせをしたためだ」と答えたという。

争議団でそんな話を聞いた者は、自分達が有利になるのではないかと喜んだ。しかし争議団に伝えると争議団の連中はますます強気になり收拾がつかなくなると考えた新聞連盟では各工場に残っていた職員たちに会議を開くように要請した。

当時は各工場の職長たちは別に団体をつくっていた。周知の通り、歴史的カナ使いといって新聞にはカナがついていたために熟練工でなければ組版ができなかった。活字を拾うだけでは新聞はつくれなかったわけである。つまり植字工は熟練工でなければ務まらず、そんな熟練工がスト際中に3人や4人工場に残っていても新聞はできない。そこで熟練工である職長は声明書などをつくったりして争議団と連絡をとり合っていた。

新聞連盟はその職長達を集めて会議を開いたわけで、争議そのものは、お互いの腹と腹とによる「腹芸」みたいなものでイデオロギーなどは全然存在していなかった。「なんとか来年までに考えようじゃないか」という程度のもので、1週間目の争議団の交渉はすでに来年の話になってしまっていた。そして各社とも「1年間はお互いの腹を信用する」ということで争議のカタがついたわけである。とに



かく 15 の新聞社がストをやり首になったのはたったの 5 人か 6 人で、警視庁に引っぱられたのは酒グセの悪い人たちだけだった。これは非常に珍しいことで私が「幻のストライキ」という表現を使っている所以である。

・翌年、萬朝報は 8 時間労働制に

その結果、翌年に完全な 8 時間制労働が引かれたのは私のいた萬朝報という新聞社だけだった。印刷工場の中では初めてのものであった。私はこの時は萬朝報の争議団では渉外をやっていた。

しかしそういう状態になると、つくづく困ったなと思えることが出てきた。それまでは朝 9 時に出てくると、定時の 5 時で帰る人、残りのその後に帰る人、また晩の 10 時までで帰る人、解版で帰る人の 4 段階ぐらいあった。そして、朝出てきて夕方に帰るのは 3 日に 1 日という状態だった。ところが純粋な 8 時間二部制となると、夜働きに出ていく人の中には、昼間他の工場に働きに出かけるというように 2 つの職場を持つ人が出てきた。そうすると、当時は失業者の多い時期だったために私は逆に労働者が憎くなってしまった。

ところが、私がその労働者の働いている先につるし上げに行くと、その人達は「どうしてもそうしないと生活ができない」と地べたに頭をつけて謝ってくる。そうになると蹴飛ばすわけにもいかない。この時本当に人間を憎むというのは困難だなとつくづく思った。しかし私は組合員に向って「2 足のわらじを履くのはやめろ」と運動を行った。

普通のストの場合は、本部があり、そこに委員長がいて指令を出してくるものだが、「幻のスト」の場合は委員長はいずに各工場ごとに交渉して行われた。その意味では形から言えば地方分権的で、アナキストやサンジカリストたちが「アナキズムのストだ」「サンジカリズムのストだ」と言うのもうなずけないことはないと思う。中央から指令が出るというような中央集権的な争議では全くなかったからだ。今のストライキとは隔世の感があるように思う。

また最も重要な点は、争議団の人たちが川柳もやれば、和歌もやる、詩も創るというような団体行動ができたために情報が伝わりやすかったということ。さらに文選工は文学青年で、当時の知識階級である新聞社の編集記者たちと区別なくつきあうなど自由さ、おおらかさを持っていて、それが争議を大きくした原因ともいえるだろう。



ただ、争議の終結は労働者の力よりも、安藤正純が宮内省で怒られるもとなった天皇の声の方が強かったのかもしれないが……。

昭和初期の凸版印刷内での解版女子労働者。この頃、労働運動でも婦人の組織化などが活発に進められたという。

- ・ 素晴しき印刷人たちとの出会い
- ・ 泣き笑いの交遊録
- ・ 首切り源之丞は人情味のある人

凸版印刷の先々代の社長、井上源之丞さんはみるからに冷い人で、「首斬り源之丞」などという名前をつけられている。

終戦直後は北京の軍司令部に出入りする印刷屋は誰もいなかった。鉄砲の玉のくるようなところへは誰も行かないということだ。その時私は満州共同印刷にいて、北京に教科書会社をつくろうという話を東京に持っていった。その話には下中彌三郎さんが乗ってきてくれて、発起人は井上源之丞さん、大橋光吉さん、佐久間長吉郎さん、青木弘さん、そして下中さんとなった。私もその人たちと一緒に相談会や重役会を開いた。そこで他の人の知らないこともずいぶん知っているのではないかと思う。

井上さんは「首斬り源之丞」などと呼ばれているのは気の毒なくらいだと思っている。非常に人情のある人である。大正11年に過激社会運動取締法案なるものが出た。それは翌年、形を変えて法律案となった。そのころ私はアナキズムの運動を行っていて、凸版の下谷の工場にピラをまきにいった。下谷は石版の工場が多く、私がやっていた東京印刷工組合の中の石版部があったところだ。石版の人は活版の人に比べれば保守的な面が強かったが、われわれがピラをまきに行こうと呼びかけると10人ぐらいでピラをまきに行った。そこに守衛が出てきてなぐり合いとなり、若い組合の連中はみんななぐられてしまった。

その中1日おいて、われわれは芝浦から上野までのデモをしたあとに5、6人ずつ乗ったタクシーを2台つらねて、またピラをまきにいき、きのうなぐられた守衛をなぐり返しに行った。

当時工場の人には靴など履かずに麻裏を履いていたため、組合の連中は麻裏で守衛の顔をふんずけたらしい。そこで一番最後にピラを持っていた私が警察にひっぱられてしまい、20日の拘留をくうことになった。ゆっくり昼寝でもできると思って喜んでいたところが3日目になると「面会だ」と言われた。どうも凸版印刷から誰かきて



20 円の金を置いていったらしい。警察の人に「おまえは 2 日ここにいたから 2 円は持っていけ」といわれ、2 円持って帰った。そして凸版の本社に行って話を聞くと「ウチの工場から縄つきが出ては困る」といって井上さんは 20 円を持っていかせたという。そんなところから「首斬り源之丞」などとは正反対の人のように思う。

個人としては今、「ありがとうございます」といえる。階級的には、「あんたは敵だ」と私は言っただけだが……。

・なぜか私が新民印書館の重役に

さらに井上さんを非常に偉い人だと思ったことがある。

北京の新民印書館は当時の金で機械を 150 万円だけ現金で買った。オフセット全版が 2 万 5 千円の頃である。活版の機械を 30 何台、断裁機を 16 台、オフセット機を 8 台買った。

その時、井上さんは私に「おまえさん、凸版の代表になれ。ほかにはただ 1 人だけ重役を出すから」と言った。どういう訳で井上さんが私を信用したか判らないが…。他の会社がわれもわれもと工場長を狙っていた時のこの井上さんの態度は非常に立派な態度だと思う。

私が東京印書館を創ったのは昭和 22 年のことだが、これが軌道に乗りかけた頃のことである。志村で凸版の工場長をしていた原という埼玉県浦和の人が、井上さんを怒らせて首になってしまった。そこで平凡社の副社長が出てきて、私の代わりに原さんを東京印書館の専務にしようと提案したその時、追放が解除になりそうだった下中さんは私に向かって「和田くんすまないがやめてくれ」と言った。下中さんが私に「すまないが」という言葉を使ったのは 2 度だけだが、これはそのうちの 1 回である。そんな経緯から私は、食うものも食わないで創った東京印書館をやめることになった。その時も、井上さんは、いろいろ心配してくれたが私は「下中さんは今、追放が解除するかどうかの大切な時だから、何も言わないでくれ」と説き伏せた。

神楽坂にある薬局の女主人は井上さんの若い時からの愛人である。ちょうど私はその時、有島武郎のところに居候していた。酔っぱらって私が神楽坂を歩いているうちに、読売の記者とけんかを始めてしまった。その時に投げた 3 つばかりの 2 銭銅貨が井上さんの愛人のいる薬局の中に入ってガラスを割ってしまい警察にひっばられてしまった。そして私が薬局に謝りに行って、初めて井上さんの愛人と



顔を合わせた。あとで「おまえはどこへ行っても暴れるんだな」と言われたが……。

そんなエピソードもあるが、__首斬り源之丞__ ≠ と言われる井上さんに首を斬られた人は、それだけの値うちしかない人ということのように思う。

ケチでも見通しのきく松雄さん

共同印刷の大橋光吉さんのことはよく知らないが、今の会長のお兄さんの松雄くんはよく知っている。松雄くんは、早稲田付属の野球のピッチャーだった人で、早稲田大学では「大橋一宮崎」というバッテリーを組み、学生野球ナンバーワンだった。

ある時、共同印刷の営業に小山というおもしろい男がいて、共同印刷満州支社なるものを奉天に創った。そのことで光吉さんに挨拶に行くと「共同印刷という名前を使っては困る」といわれた。ところが小山は「共同印刷株式会社満州支社では悪いかもしれないが、共同印刷満州支社というのは固有名詞だ。そういう名前なんですよ」と答えた。その会社は結局、後に松雄くんが重役となり本社のお許しをうけた株式会社となった。

松雄さんという人はケチだったがなかなか見通しのきく人だった。たとえば松雄さんは中馬の2回転の機械を当時、1 ダースあつらえたが、こんなことは共同印刷が日本で初めてではないか。あの頃は活版の印刷屋で中馬の機械が入ったといえば客がたくさんついた時期である。

・活字の1回使用は共同が初めて

今は活字の1回使用は当たり前のことになっているが、この1回使用を始めたのは株式会社林栄社の先代社長の林くんである。当時は、鉛で活字ができていたために印刷すると鉛が減ってつぶれてしまうから印刷工場が儲らないという考え方をする人が多かった。そこでガラスや瀬戸物の活字なども出てきた。

その頃は、平凡社の下中さんの世界大衆文学全集が売れて景気のいい時分だった。鈴木さんと下中さんが会って話をした時に、下中さんは「私も出版をやっていて印刷工場のことを知っているが、どこの工場に行っても同じような活字が並んでいて、同じような印刷機があるだけ。これでは一つの企業体とはいえないし、一つの印刷の町でしかない。あれらの機械を10台も合わせた機械とか、もっと能率的なことを考えなくてはだめだ。これからは8時間制という



ものが当然実行されてくるはずだ」と発言した。

そこで鈴木さんが下中さんに出したのが「活字1回使用の原価計算のパンフレット」で、活字を1回使用すれば、これだけの得をするということが書いてあるパンフレットである。下中さんは大衆文学全集を作っていたために、共同印刷の大橋光吉さんとよく会っていたが、その時下中さんはこんなことがあると大橋さんに話した。

すると大橋さんは「実は林が買え買えというから、そのための機械は買ってある」と答えた。そして共同印刷で活字の1回使用を初めて行った。これは大橋さんはケチでも機械好きであって、また使う銭は惜しまずに出したということの証明になるだろう。

(1) 実は技術なんか何も知らんのダ

- ・満州行から……
- ・冀東政府から脱出して命拾い

万里の長城から長河江に行く間に冀東(通州)地区というのがあり、そこに日本の関東軍の傀儡政権である冀東防共自治政府なるものができあがった。殷汝耕という人が主席で反蔣反共だった。その政府は日本の小学校の教科書を作るという計画をした。そして教科書を作るために私は満鉄の教育研究所で新しく原稿を書き直すというようなこともやった。というのは、それまでの教科書は数学にしても「むこうから日の丸の飛行機が10基飛んできた。わが国の飛行機が3基行って5基落としたら何基残るか？」というもので抗日的だったからである。それではいけないということで新しく作り直した。

その時は、相手は傀儡政権であったために、われわれは百万円かかるところを2百万円かかるとふっかけたり、また現金でやるといって80万円ぐらい先に金をさらったりもした。つまり、まるまる損をしても損をしないだけの金は最初にもらっておいたということである。

私は冀東防共自治政府の教科書を5万冊つくったが、その時は現金をもらってみんな下請けに出し、紙型だけを萬朝報の工場で作っていた。そんなところから私自身はいつも懐に2万円から3万円の金を持って歩いていた。大学卒業者の給料が30円の頃である。そして、天津に行っては国際的なキャバレーで3日間ぐらい遊んでいたこともある。



そんな風にさんざんぜいたくをしている内に冀東防共自治政府で保安隊が反乱を起こし居留民を全滅させてしまう事件が起きた。その時、私は城門のしまる1時間ほど前にそこを脱出して命が助った。しかし居留民は9百何人いたうちの9百人が、日本軍が配給した散発式鉄砲で女でも子供でも殺されてしまった。これは盧溝橋事件が始まる前の昭和12年7月28日のことで通州事件といわれている。

なぜ私が助ったのか。私はそこに奉天から、けんかばかりしていて仕様もないが、機械の据えつけのうまい不良の職人を連れていった。その男が突然「私は支那人だから良いが、先生はここにはいけない」と言ってボロの自動車を持って私を迎えにきた。何も知らない私は「変なことをいうな」と思いながらも、普通の自動車であれば通州から30分で行けるところをボロの自動車に乗り2時間もかかって北京にたどりついた。

北京で「やれやれ」と思い、キャバレーでダンサーを相手に騒いでいると、知り合いがやってきて「あんた、よく生きてるね」という。そこで私は初めて、保安隊の反乱があり、皆が殺されたということを知った。

私にはそんな経験もあれば、ピストルで撃たれたことも何回かある。ところが当たらない。

後に市ヶ谷の未決の監獄で私をピストルで撃った男と一緒に「ピストルがちっとも当たらないじゃないか」と言うと「とんでもない。当たらないように撃ったんだ」という。この男は非常に鉄砲の巧い男で、2間離れたところからでも鳥打ち帽子を撃てることで有名だった。私は無鉄砲だったためにいろいろな目に合った。

こんなこともある。北京に新民印書館を創り、共同や凸版から百人ぐらいの技術者を送りこんだ時に、活版の機械だけで70台、鑄造機を16台設置した。その時に写研の石井茂吉さんが写植機を売りこみにやってきた。何しろ私は150万円の現金を握っていて好きなように機械を買っていた時である。石井さんは2千円ぐらいの写植機のことのでグダグダ言ってくるので非常に困った。そこで冷たくしたところ、今の写研から出ている刷り物にはみんな「和田さんは最初冷たかった」と書いてある。

・仲の悪い大橋と井上には困った

私が北京でやっていた新民印書館の社長は漕汝霖さんで、日本の



中央大学を出ている人だ。この人は会社をつくろうとして臨時日本政府が乗り出してきても御輿を上げなかった。そこで今度の会社にはこれこれの重役がくると言っておぼろげに見せたところ、「私は日清印刷の青木さんなら知っている」という。よく考えてみると蒋介石なども日本陸軍の士官学校にきていたが、向こうからはたくさん支那人が日本にきていて今の大学生と同じように、自分の書いたものをプリントして内地に送っていた。そのころは今のようにはプリンターがあまりなくてガリ版でやっていた。その時に漕さんは青木さんに随分便宜を計ってもらっていたらしい。

そんなことから容易に御輿を上げない漕さんが社長になってくれた。結局、副社長に下中彌三郎さん、社長に漕汝霖さんということになったわけである。下中さんはいつも社長、委員長、理事長、幹事長という名前のついたものばかりやっていたが、この時だけは「副」という名前のついたものになった。

そんな風にして出発した新民印書館だが、井上さんや大橋さんは非常に仲が悪かった。相談会があっても、一番奥の床の間のところに井上さんが座ってしまうと、大橋さんは入ってこない。大橋さんは「私はここで結構です」と控室に座ってしまう。

その仲の悪いのを巧くコントロールしたのが青木さんである。「床の間があるからイカン」ということで「丸テーブルにしたら上も下もないだろう」とテーブルを丸くした。青木さんとはそんな円満な人だった。

・昔の機械屋はイキな男が多かった

新民印書館の機械を買う時、私は浜田精機の先代社長に「まけてくれ」とは言わなかったが「納期を少しなんとかしてほしい」といつか会ったことがある。

焼付の機械を発明した小林徳次郎という人が奉天で協和オフセットの会社をやっていた。その会社を創る時に2万何千円しか持っていなかったが、「オフセットの全版を2台ほしい」と浜田さんに言ったそうだ。浜田さんは「よし、出世払いでいい」と2台売ってくれたという話があった。

そんな話を知っていた私は「小林さんに便宜を図ったんだから、私にもそうしてくれ」と言うと、「あんたは金を持っているからそんな便宜は図れない、オレは小林にほれたんだ。男が男にほれて2万や3万の金を出世払いにしてもあたり前じゃないか」という答が返っ



てきた。

今の機械屋のオヤジでそんなイキなことを言う人はいないだろう。

苦勞して考えた活字の1回使用

下中さんは「活字のない印刷所」をつくったが、ポイント活字を民間の印刷所に初めて入れた人である。

もともとポイント活字の中で7ポイント7分5厘という活字は、昔の活字より1ページが1段多くなるものである。1ページが1段多いということは広告料などに関して非常に影響のあることだった。

そのころ下中さんは大連で東亜印刷の事務をやっていた。その時点では満鉄が一番最初に規程の全部の活字を7ポイント7分5厘でつくったが、下中さんはそれを見ていたために、7ポイント7分5厘の活字を入れたいという。4人分の活字は20万ほどかかり、また外字も入れなくてはならなかったが……。そんなことから下中さんは活字というのは変なものだと気がついたらしい。

それから単式印刷にして、さらに写真植字へと進んだ。

活字から写真植字に移ってきた間にはガラスや瀬戸物の活字も出てきたが、ガラスの活字は角が鉛より硬いがルーラがすぐズタズタになってしまう。瀬戸物の活字は割れてしまう。そこで先にも話した林栄社の林くんの考え出したのが、アルミニウムと亜鉛でつくった硬質活字。ところが鉛は重いためにB5の原版で組んで8ページの機械にかけ、くさびを木のつちで締めるとパクンとになってしまう。鉛は重いからパクンとはならないが、硬質活字はつぶれないがパクンとなりまん中が持ち上がってしまう。

それで印刷同業組合の組合長をしていた鈴木正平さんにそういう活字に関する相談話が随分持ちこまれてきた。そして鈴木さんの考えたのが、「カナだけを鉛にして、漢字だけを硬質活字にしたらどうか」ということだった。硬質活字が柱になって鉛のつぶれるのも少いだろうと考えたわけだ。しかし版をこわす時に両方が鑄造機に入ってしまうと、鑄造機のコンディションが狂ってしまう。結局、その時に考え出したのが活字の1回使用ということになる。

このように苦しんだ結果生まれた、活字の1回使用を一般の工場に普及させたのは大橋さんだったわけだ。



・無鉄砲で何をするか判らない男

井上さんは「和田は工場長だが給料だけは重役級のものを出世」といっていたという。私は知らないことだったが、「あいつはストンキョウで何をするか判らないから金だけは不自由させてはいけない」ということからだそうだ。

私は印刷屋でメシを食ってきたが、名刺を組ませてもろくなものもつくれず、写真植字でもシャッター一つきれない。ただ何かを考えてこうしたら良いと思うと、プロセスを無視してとんでいく人間である。そんな無鉄砲さが売り物だった。

